

ESD の視点を取り入れた戦後沖縄の歴史学習に関する研究

—地域素材を生かした単元構想—

屋 良 真 弓

(南風原町立南風原小学校教諭)

坂 井 武 司

(教育学科教授)

赤 井 秀 行

(九州ルーテル学院大学講師)

西 竜 王

(南風原町立津嘉山小学校教諭)

本研究では戦後の沖縄の歴史に焦点を当て、ESD の視点から、沖縄の地域素材を生かした教材を開発し、沖縄の子供たちだからこそ学ぶ必要性のある歴史学習を提案することを目的とする。その際、花ブロックについての自作教材や終戦直後のインタビュー動画を用いて、戦後の復興を題材に授業実践に取り組んだ。戦後復興について、地域素材を活用し教材化することで自地域と他地域(教科書で取り扱う戦後復興の様子)の往還的な学習が可能となり、多面的・総合的に考える場面が設定できた。また、単元内自由進度学習の学習形式を適宜取り入れたことで、児童らの主体的に学ぶ態度が大切にされ、更に批判的に考える力の萌芽も見受けられた。ESD の視点を取り入れた地域素材の単元を通して、当事者意識を持って地域について学習し、行動意欲へとつなぐことができた。

キーワード：戦後の沖縄、社会科教育、花ブロック、ESD

1. はじめに

(1) 社会科教育における ESD 教材

今なお世界各地で紛争が絶えず、武力による侵略や核の脅威は、遠い世界で起きているのではなく、自分の生活に関係していることであると意識せざるを得ない状況となっている。このような地球規模の課題を解決するためには、OECD Future of Education and Skills 2030 (OECD Education 2030)で示された「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」(OECD, 2019)であるエージェンシーの育成が不可欠である。

一方、Education for Sustainable Development (ESD) において育みたい力として、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議(2011)は、「問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視した体系的な思考力(システムズシンキング(systems thinking))を育むこと、批判力を重視した代替案の思考力(クリティカルシンキング(critical thinking))を育むこと、データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力、リーダーシップの向上」を示している。このことから、エージェンシーの育成を目指す OECD Education 2030 と ESD が目指す方向性には共通する部分があると考えられ、今後 ESD の需要は高まると予想される。

ESD は総合的な学習の時間だけでなく、ESD の視点を取り入れた学習として、各教科の特性に応じた取り組みが求められている。特に、小学校学習指導要領解説社会科編(文部科学省, 2018)の小学校社会科改訂の趣旨に「持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度」の育成が示されており、社会科教育は ESD との親和性が高いと考えられる。

小学校社会科をベースとした ESD に関する授業設計・実践に関する研究として、水俣病を題材とした授業開発に関する研究(宮下, 2024)、環境問題をテーマとした単元開発に関する研究(桑原他, 2021)、水資源を題材とした社会科及び総合的な学習の時間における授業開発・実践に関する研究(島, 2021)、森林資源をテーマとした研究(新宮他, 2020)等がある。このように、「環

境」に関連するテーマを題材とした実践的研究は多く見られるが、戦後の歴史をテーマとした研究は殆どない。Sustainable Development Goals (SDGs)の目標 16「平和と公平をすべての人に」（外務省）の達成が脅かされる世界の現状を鑑みたとき、ESDの視点を取り入れた社会科教育として、戦後の歴史学習に焦点を当てた教材の開発が必要であると考えられる。特に、今なお基地問題に揺れる沖縄においては、その教育的意義は他の地域とは異なると考えられる。戦後復興の中で、平和を希求し、たくましく、そして強かに生きてきた沖縄を知り、これからの沖縄の平和について自らの考えを形成することは、平和の実現に向けたエージェンシーの育成にもつながると考えられる。

(2) 本研究の目的

そこで、本研究では戦後の沖縄の歴史に焦点を当て、ESDの視点から、沖縄の地域素材を生かした教材を開発し、沖縄の子供たちだからこそ学ぶ必要性のある歴史学習を提案することを目的とする。

2. 第6学年社会科における戦後の歴史学習

(1) 学習指導要領での位置付け

小学校学習指導要領解説社会編(文部科学省, 2018)の第6学年の内容「(2)我が国の歴史上の主な事象について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する」とあり、知識及び技能として「ア(サ) 日中戦争や我が国に関わる第二次世界大戦、日本国憲法の制定、オリンピック・パラリンピックの開催などを手掛かりに、戦後我が国は民主的な国家として出発し、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解すること」と記されている。また、思考力、判断力、表現力等として「イ(ア) 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え、表現すること」と表記されており、解説には「歴史を学ぶ意味を考え

るとは、歴史学習の全体を通して、歴史から何が学べるか、歴史をなぜ学ぶのかなど歴史を学ぶ目的や大切さなどについて考えることである」とともに、「過去の出来事と今日の自分たちの生活や社会との関連や、歴史から学んだことをどのように生かしていくかなど国家及び社会の発展を考えることである」と示されている。つまり、史実を知ることには終始せず、そこを起点にこれからの社会について考え、選択判断し表現する力の育成が望まれていることがうかがえる。さらに、内容の取り扱い『キ』には「イ(ア)については、現在の自分たちの生活と過去の出来事との関わりを考えたり、過去の出来事を基に現在及び将来の発展を考えたりするなど、歴史を学ぶ意味を考えるようにすること」と記されており、過去と現在との関わりにおいて、なぜ歴史を学ぶのかを念頭に置きながら学習を進めることの重要性がうかがえる。

本研究において取り扱う単元の内容は第二次世界大戦である。先の大戦では、国内各地への空襲、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、国民が大きな被害を受けた。それらの史実を踏まえ、歴史を学ぶ意味とこれからの社会をどのように形成していくのかを併せて考える場を設ける必要がある。

また、本単元の後に、グローバル化する世界と日本の役割について取り扱う単元が続く。グローバル化する国際社会において、今後、我が国が果たすべき役割、義務や責任について、過去の戦争や原爆による人類最初の災禍を経験した我が国の立場、国際的な協力や援助を必要としている国や地域の人々などの立場、国際連合など国際的な機関の立場などから多角的に考えたり、世界の人々と共に生きていくために大切なことについて、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりして、世界の平和に向けた自分の考えをまとめるようにすることが大切となる。このような単元のつながりを考慮すると、本単元において、これからの社会のあり方についてじっくりと考えさせる場を設定することが必要である。過去の戦争や原爆による人類最初の災禍などの経験を生かし、国際

社会の平和と発展のために、我が国や日本人が今後果たさなければならない責任と義務があることに気付くようにするとともに、世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えることができるようになることが期待されている。

また、戦争との関連では、「我が国の政治の働き」に関する「知識・技能」における平和主義の原則や、「グローバル化する世界と日本の役割」に関する「思考力・判断力・表現力」における唯一の原爆被災国としての世界平和に向けて果たすべき責任と役割とも関連する。戦後の復興において、平和で民主的な社会を築き上げてきた先人の意志を受け継ぎ、平和を願う日本人として、世界各国の人々との共生と平和な国際社会の実現に向けた継続的な努力の重要性への自覚を養うことが重要である。

(2) 社会科教科書での取り扱い

教科書(大石他, 2024)における、沖縄の戦後の扱いは、図1に示した内容のみである。



図1 教科書における沖縄の戦後の取り扱い
(『小学社会6』教育出版：大石 他, 2024, p. 231)

先述したように、学習指導要領に示された内容は、戦後民主的な国家として出発し、国民生活の向上とともに国際社会に復帰していく様

子を、五輪を通して学んでいくものである。サンフランシスコ講和条約によって、米軍統治下に置かれた沖縄は、日本国憲法に基づいて民主的な国家として出発した他府県とは違う歴史を歩んできた。民主国家の拠り所となる日本国憲法が適用されなかったというのが、沖縄の戦後復興の歴史である。よって、自地域(沖縄)の歴史を学び、これからの身近な社会について考えるには、教科書における沖縄の戦後に関する取り扱いがわずかであり、歴史を学ぶ意味に基づき平和な社会について考えるには、教科書の記載内容が十分ではないと考えられる。

また、上述の「システムズ シンキング」というESDの資質・能力を養うためには、教科書に記載されている内容と自地域(沖縄)の歴史について往還し、比較しながら考える場を設定する必要がある。したがって、教科書や資料集を通して、自地域(沖縄)の戦後の歴史を学ぶだけでは不十分であると判断し、花ブロックを起点とした戦後に関する授業を追加で組み入れることとする。

(3) 戦後沖縄に焦点を当てた歴史学習の価値

国内で唯一の地上戦が行われ、悲惨な過去を持つ沖縄は、米軍統治下を他の地域よりも長い間経験している。今なお戦争と平和の間で悩み苦しんでいる状況が続いている現状がある。

沖縄戦により、県内全域が焦土と化したことで、戦前の産業は全て灰燼に帰した。その後、サンフランシスコ講和条約により日本から切り離され、米軍統治下で多くの土地を基地に奪われ、切り離された本土からも基地を移される中で、沖縄の人たちは強制的に基地と共存せざるを得ない状況に置かれた。1972年に「琉球諸島及び大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定」の締結により、沖縄が本土復帰を果たし、2022年に50年を迎えた。しかし、今もなお、米軍基地問題で揺れる沖縄において、戦後の歴史学習の持つ意味は他の地域とは異なる事情があると考えられる。

戦後の沖縄では、アメリカ文化やライフスタイルの影響を受け、そのカルチャーは瞬く間に

根付いていった。A&W や BLUE SEAL などの大手アメリカチェーン店が沖縄にあるのも、ある意味、戦後の米軍統治下のなごりである。それは建物も例外ではない。戦前の沖縄はいわゆる木造建築、今でいう沖縄古民家が主流であった。戦後、米軍が基地を整備するために、アメリカからコンクリートやブロック製造機を持ち込んだことがきっかけとなり、沖縄にコンクリート建築が広まっていった。その発展には、アメリカからブロック製造機のカatalogを取り寄せ、自作の製造機で沖縄の風土にあったブロック、今では沖縄でよく見かける「花ブロック」を製造した一人の人物がいる。

このような沖縄の身近な風景と人物とを関連づけ、戦後の沖縄を紐解く歴史学習は、アメリカの影響を受けつつ、戦後の復興において、前向きに、たくましく、したたかに生き抜いてきた沖縄の人々の思いにふれる機会となる。つまり、沖縄の子どもたちが、次の時代に継承すべき沖縄の心や平和で豊かな社会について、自らの考えを形成するきっかけとなるとことが期待できる。ここに、戦後沖縄に焦点を当てた、沖縄の子どもたちのための歴史学習の価値があると考えられる。

また、このような歴史学習は、SDGs の目標16「平和と公平をすべての人に」の達成にもつながると考えられる。沖縄にとっての「平和と公平」を考えると、米軍基地問題を切り離すことはできない。沖縄の抱える問題は、沖縄だけの問題ではなく、県外の人々の理解が不可欠であり、子どもたちの目線で全国に沖縄を発信していくことが重要である。そのためにも、沖縄の子どもたちが、自らの考えを形成しておくことは不可欠であり、SDGs の達成に向けた第一歩となると考えられる。

3. 地域素材を生かした戦後沖縄の歴史学習

(1) 授業の設計

① 地域素材の活用

図2に示す花ブロックは、戦後の沖縄の歴史の中で独自に発展してきた文化として価値ある地域素材である。「花ブロックを題材として

戦後の沖縄を捉えることは、今なお米軍基地問題で揺れる沖縄において、次の時代を担う子供たちに、前向きに、たくましく、したたかに生きるメッセージ性がある」(坂井他, 2024)と考えられる。

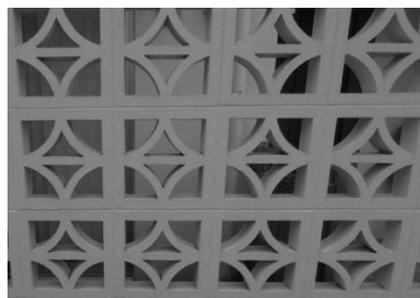


図2 花ブロック

他にも、図3に示す現在の琉球ガラスは、戦後の原料不足の中、米軍施設から大量に廃棄されていたコカ・コーラやビールなどの廃瓶を原料とし、カレット状に砕き、溶かして作ったことが始まりである。琉球ガラスの特徴が「気泡」と「色」である。本来であれば不良品と扱われるが、逆に、その気泡を味として見出し、独自に発展させてきた。また、廃棄されたガラス瓶の色を生かした作品となっている。花ブロックと同様、戦後を生き抜く沖縄の人々の知恵が詰まった地域素材である。



図3 琉球ガラス

これらの地域素材を生かした単元構成により、戦後の日本における歴史的事象を表面的に理解するだけの歴史学習から脱却できると考えられる。戦後沖縄の復興を支え、その時代を生き抜いた人々の存在にふれることにより、子供たちが自分もその歴史の延長線上で今を生

きているという自覚をもち、今の自分たちには何ができるかを考えることのできる歴史学習となると考えられる。

②ESD の視点の活用

学習指導要領(文部科学省, 2018)の前文には「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するの、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である」と記されており、学習指導要領に基づいた教育課程と ESD は軌を一にするといっても過言ではない。以下に示す「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例」を参考にカリキュラムを組んだ。なお、本研究の概要と位置付けは、図 4 のカリキュラムマネジメント表に示す。

【能力・態度の例】

- ① 批判的に考える力
- ② 未来像を予測して計画を立てる力
- ③ 多面的・総合的に考える力
- ④ コミュニケーションを行う力
- ⑤ 他者と協力する態度
- ⑥ つながりを尊重する態度
- ⑦ 進んで参加する態度

図 4 ESD カリキュラムマネジメント表

花ブロックを通して、教科横断的な学習を年間を通して行うこととした。図 4 のように、「養いたい ESD の資質・能力」と「育てたい ESD の価値観」の双方を中心に位置づけ、それらが

身につくよう、学習形態を工夫し、発問や課題などを配置した。具体的には、算数、国語、総合、社会を教科の目標と養いたい ESD の資質・能力、価値観のそれぞれがつながり達成できるよう、コンテンツ(素材・教材)、コンピテンシー(資質・能力)の両方でひもづけを行った。

本研究では戦後沖縄の歴史学習に焦点を当てているため、SDGs の目標 16「平和と公平をすべての人に」(外務省)と関連している。また、沖縄で独自に発展した文化としての地域素材を活用しているため、発展的ではあるが、SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」の中のターゲット 4「世界の文化遺産や自然遺産を保護し、保つていくための努力を強化する」(外務省)ことに関連すると考えられる。本研究における社会科教育は、SDGs の達成につながる教育という意味でも、ESD の視点を取り入れた歴史学習ということができる。

また「エージェンシーの育成は、学習の目標であり、また学習のプロセスでもある」(OECD, 2019)ということ及び「生徒が自らの学習のエージェント(agents)であるとき、つまり何をどのように学ぶかを決定することに積極的に関与する時、生徒はより高い学習意欲を示し、学習の目標を立てるようになる」(OECD, 2019)ことを踏まえ、エージェンシーの育成という意味においても単元内自由進度学習を取り入れることとした。具体的には、単元の開始時に単元のねらいを児童と教師が共通確認し、単元のゴールであるパフォーマンス課題を提示する。そのあと、それぞれの子供の関心に応じて、調べる内容、調べる資料、調べる場所を自由に選択しながら探求できるように学習環境を整えることとした。

一斉授業で本単元を実施した場合、教科書の内容を学ぶだけにとどまってしまうことが多い。自由進度学習では、教科書の内容をベースにして、子どもたちが関心を持った事柄のある程度自由に調べ、追究する時間がある。そのため、図書館に資料を探しに行く児童、タブレットで調べ始める児童、一つの社会的事象にこだわり考える児童、様々な学びの様相が期待でき

る。大人が説明しすぎずに、子どもたちの学ぶ力に委ねられている時間が多い自由進度学習だからこそ、一斉授業で行ったときには、素通りしてしまいそうなことにも各々がこだわりを持った社会的事象に立ち止まり、吟味し、疑問を持ち、批判的に考えることができると想定される。

③単元構成

本単元「平和で豊かな暮らしを目指して」では、5つの学習目標及び、6つの学習内容を設定し、図5の学習の手引きのように、それぞれ「めあて」と「学習の流れ」として位置付けた。そして、この学習の手引きを児童と共有して学習を進める。市販のワークブックと教科書に沿って学習を進めるとともに、必要に応じて、資料集や図書資料、デジタル資料なども活用することを児童と共有した。

自由進度学習 平和で豊かな暮らしを目指して

()組 名()

*標準時間8時間(12月13日(水)にテスト予定)

めあて

- ・戦後の日本について理解する。
- ・写真、地図帳や年表などの資料を使って、情報を適切に調べることができる。
- ・戦後の日本のできごとについて考えたり、課題を把握して、考えたことを説明したり、それらをもとに話し合うことができる。
- ・戦後の日本について、学習の問題を解決しようと考えることができる。
- ・平和で豊かな社会について考えることができる。

学習の流れ

学習内容	教科書	ノート	答えカード(白/ロ)
1. 焼け跡からの出発①	P216～P217	P36	答えカード①
2. 焼け跡からの出発②	P218～P219	P37	答えカード②
3. もう戦争はしない	P220～P221	P38	答えカード③
4. 日本の独立と東京オリンピック・パラリンピック	P222～P223	P39	答えカード④
5. 産業の発展と国民生活の豊か化	P224～P225	P40	答えカード⑤

サブ！パフォーマンス課題 「日本の国づくりにタイトルをつけよう」

あなたは、終戦後の総理大臣です。「日本はこんな国を目指します」と国民や諸外国に伝えることになりました。国づくりにタイトルをつけて、その理由を説明しましょう。

作成方法：ロイノート カード2枚(1枚目：タイトル、2枚目：理由)

ロイノート提出ボックスに提出する。

P226～P227 P41～42 答えカード⑥

サブ！パフォーマンス課題 「戦後の沖縄の人たちの4コマ漫画を描こう」

あなたは4コマを描く漫画家さんです。沖縄タイムス(琉球新報でもOK)が「おぼータイムス」を担当することになりました！ギャラ、1本5000円!!! テーマは「戦後の沖縄の人たち」4コマ漫画を描いてほしいと新聞社から依頼されました。

作成方法：先生から4コマ漫画シートをもらって、書く。

4コマ漫画の条件(日評稿 合格の条件)

- ① インタビューシート、インタビュー動画などで学んだことを入れる。
- ② 必ず、セリフを書くこと(当時の人たちの考えたこと、思っていたことなど)
- ③ 4コマ毎のタイトルをつける(なぜ、この内容にしたのか理由を説明)

パフォーマンス課題「50年後の私への手紙」

あるポストに手紙を入れると、なんと！50年後の自分に届くというポストがあります。

そこで、あなたは50年後の自分に手紙を書くことにしました。

手紙のテーマは「私が考える豊かな社会について」です。

50年後の自分は何歳ですか？どんな仕事をしていますか？家族は？住むところは？..色んなことを想像し、50年後の自分に語りかけたい。そして、自分が考える豊かな社会について話をしてほしいと思います。

手紙の条件(日評稿 合格の条件)

- ① SDGsメガネをかけて、豊かな社会を考えること。
- ② 歴史学習で学んだことを生かして、これからの社会をイメージすること。

図5 単元の学習の手引き

学習内容6に相当する時期に、図6の沖縄の終戦直後の様子についての動画と花ブロックの歴史に関するインタビューシートも児童に提示する。沖縄戦の平和学習のアーカイブにある様々な動画の中から、終戦直前・直後の混乱の中、生活を立て直した様子をたくましく前向きに話しているものを選び、児童に視聴させる。

現状として、教科書は国全体の時代の変化について書かれており、大きな主語(国家など)で語られているため、戦後の復興について児童は漠然と捉えている様子である。そこで、小さな主語(私など)で当時の様子が語られているエピソードに触れ、当時の様子を住民の具体的な視点から捉えてほしいとの授業者の意図がある。また、目指す社会は、一人一人の想いや願いで形作られていることを実感したうえで、これからの社会のあり方について考えてほしいとの意図も込められている。さらに、花ブロックの歴史に関するインタビューシートには、米軍基地と共存せざるを得なかった状況の中で、前向きに強かに生きる姿が読み取れるような内容になっている。

平和で豊かな国をめざして 資料⑥(花ブロック)

君は「花ブロック」を知っているかい？
算数の対称の時間、国話の時間、総合の時間で学んだ！あの「花ブロック」です。

花ブロックの歴史について、安里さんに聞きました！
安里さんは、山内コンクリートブロックの社長さんです。日本一の花ブロック生産量です！

「花ブロック」はいつ、どのようにして誕生したのでしょうか？

第二次世界大戦後の沖縄は米軍統治下の元、アメリカ文化やライフスタイルの影響を受け、そのカルチャーは早くも沖縄に根付いていきました。今ではお馴染みのA&Wやフルーシールなどの大手アメリカチェーン店が沖縄にあるのも戦後の統治下のなごりからです。それは建物も例外ではありません。

戦前の沖縄はいわゆる木造の、今でいう「沖縄古民家」が主流の王道でした。

戦後、米軍が基地を整備するにあたって、アメリカからコンクリートやブロック製造機が持ち込まれた時、沖縄でもアメリカから機械のカatalogを取り寄せて機械を自作しました。

「沖縄は天然素材なので自産自足が強く、その自産自足を和らげるために、影を作って風を逃そう」ということでブロックが広がったと聞いています。

機械を自作(自分で作る)って、すごい!!!!

米軍統治下の沖縄の状況は、どうだっただろう。前に、復帰50年のワークショップで勉強した時には…沖縄はどんな様子だっただろう。

決して楽ではない沖縄の状況。そして、重があることによって、人権が踏みしめられる事件が数多く起きていた当時、米軍基地建設をお願いされていた沖縄の人たちは、どんな気持ちで、花ブロック製造機を取り寄せて、花ブロックをつくったのだろう。

図6 学習内容6におけるワークシート

学習内容6の後に、図7に示す『豊かな社会』になるために大切なこと』のワークシート(開発教育協会, 2016)を利用し、参加型ワークショップを設定した。児童らは昨年度、総合的な学習の時間に「SDGsメガネをかけたなら」をテーマに探究活動に取り組んできた。その学びをベースに、歴史学習の総括を「豊かさとは何か」について問うことにした。これまでの学習をふまえて、豊かさを考えることは、ウェルビ

ーイング(より良い生き方, より良い社会)を考
える一助になることを意図した。単元で身に付
けさせたい力を踏まえ, 視点を与えて「豊かな
社会」について, ワークショップを通して考え
させる。

「豊かな社会」になるために大切なこと		
名前()		
1. 「豊かな社会」ってどんな社会?(3分)		
2. 「豊かな社会」になるために, 大切だと思うことは? ①あなたが大切だと思うカード3枚を選び, Oをつけましょう。空いている所に理由も書いてね!(10分)		
1. おしゃれなもの, おいしいもの, 便利 なものが入る	2. 近所に大型ショッピングモール(イ オンやパルコみたいな施設)や遊べる施設 (カウンスパみたいな施設)がある。	3. 好きな仕事に就くことができる
4. まじめに働けば十分な収入(給 料)を得ることができる	5. 自分たちの世代にも, 将来のため に十分な自然や資源を残されている	6. 空気や水, 土地が汚染物質で汚さ れている心配がない
7. 学校でのことは生徒が自分たちで 話し合って決められる	8. 子どもにかかわる法律やまちづくり などの決定に, 子どもの意見が取り入 れられる	9. お金がなくても, けがや病気など必 要なときに医者にみてもらえる
10. 暴力やいじめにおびないでく ることができる	11. 車の通りや不審者におびえたり せず, 外で自由にのびのびと遊びま わることができる	12. 安心して眠る場所がある (安心して生活できる家がある)
13. 給食や制服, 勉強の道具, うわば きや体操着などが無料で配られる	14. だれでも家庭の事情に左右されず, 自 分の夢や希望を実現するために, 学校や家 で必要な教育を受けることができる	15. 違った学校や教育の種類を理由 なく, 将来の進路が制限されない
16. 返さないでもない「奨学金制度 (学校に行くお金を支援する制度)」 が充実している	17. 性別, 見た目, 考え, 行動, 障がい, 病気 など「人と違うこと」を理由に差別され たり, いじめられたりする心配がない	18. 自分が人と違う行動や考えをし ても, 周りに受け入れられる
19. 家族以外に, いざというときに頼 れる大人がいる	20. 安心して一緒にいられる友だち がいる	21. お金がなくても, 安心して生活が できて, 勉強もできる社会のしくみがある

図7 参加型ワークショップにおけるワークシート

さらに, 単元全体として3つのパフォーマ
ンス課題を設定した。単元終末のパフォーマ
ンス課題として「50年後の私への手紙」を位置付け,
サブパフォーマンス課題①「日本の国づくりに
タイトルをつけよう」と, サブパフォーマンス
課題②「戦後の沖縄の人たちの4コマ漫画を描
こう」を位置付けた。3つのパフォーマンス課
題に取り組む材料として, 地域教材を活用した
学習活動を位置付けた。ここでは, 図6に示す
「花ブロックの歴史」に関するインタビューシ
ートを活用した。パフォーマンス課題を設定す
るにあたり, 単元で身に付けた学習内容が発揮
できるような課題内容になるよう手立てを講
じた。1つ目「日本の国づくりにタイトルをつ
けよう」は, 戦後の日本について, 複数の歴史
的事象を一般化し表現させるため“タイトル付
け(その理由)”とした。2つ目「戦後の沖縄の人
たちの4コマ漫画を描こう」では, 図8に示す

ワークシートを用いて, 戦後復興時の想いや願
いを歴史的事象とつなげて, 端的に表現してほ
しいとの思いからセリフを書き込んだ4コマ漫
画とした。

社会科「平和で豊かな暮らしを自分で」		タイトル
サブ パフォーマンス課題 ②		
テーマ「戦後の沖縄の人たち」		
() 名 ()		1
タイトルの理由		2
私が考える戦後の沖縄の人たちとは...		3
		4

図8 サブパフォーマンス課題②のシート

最後3つ目の「50年後の私への手紙」は, 歴
史学習の総括として位置付けた。サブパフォー
マンス課題②と同様, 単元における社会科の記
録に残す評価の評価材として位置付けている
ため, 明確な評価規準を児童と共有した上で,
取り組むこととした。学習支援アプリ「ロイロ
ノート」を活用し, 成果物はタブレットで作成
してアプリ上の提出箱に提出させた。その後,
共有機能を用いて, 子ども同士で共有させた。

④対象児童

本授業に参加する児童は, 沖縄県の公立小学
校第6学年の児童である。本授業実践までに,
算数科の「対称な図形」において, 花ブロック
を題材とした学習をするとともに, 国語科にお
いて他県の児童とZoomによる遠隔交流をし,
花ブロックも含め, 沖縄の特徴について紹介す
る学習を経験している。

(2) 授業の概要

①単元全体を通じた児童の授業中の様子

社会科の授業が始まると, 児童は思い思いの
場所に移動して自らの課題の続きを始めてい
た。さらに, 教科書と資料集が主たる学習材で
はあるが, 教科書の内容で腑に落ちない内容が

あると、図9に示すように図書館から資料を借りて調べる姿も見られた。また、図10に示すように、パフォーマンス課題に取り組む際には、席を自由に移動しながら、友達と内容を確認したり相談したりして進めていた。他にも、一人で黙々と学習を進めていたかと思えば、次の日は友達と相談したいところを持ち寄って、共に学ぶ姿もあった。その際、手塚治虫の自伝を手掛かりに、当時の思いを探ろうとする様子が見られた。特に目を引いたのは、普段の授業では、集中して授業に取り組むことがやや困難な児童も、タブレットや資料で学び進めていた意欲的な姿であった。



図9 児童の様子①



図10 児童の様子②

②学習内容1～5とサブパフォーマンス課題

サブパフォーマンス課題①へとつながる学習内容1～5について、児童の振り返りをもとに考察を加える。まず、学習内容2と学習内容3における、児童の振り返りから、以下の2つのような疑問(下線部は筆者追記)が見られた。

児童の振り返りに出た2つの疑問は、教科書の歴史と自地域の歴史を比較しながら学習したからこそ出たものだ^{と推察される}。毎年沖縄

では、6月頃になると平和学習が行われ、そこでは沖縄戦の様相や当時の人々について学ぶ。沖縄戦における地域住民の不当な扱いや、平和な世の中について多面的に考える場が多く設定される。当時の状況について、教科書と自地域、双方の歴史記述をつなげて総合的に考えた結果であった^{と考える}。

[学習内容2における振り返り]

戦争の怖さを知った日本はもう戦争をしな
いと思ったことです。だから、いろんな改革
が行われたと思いました。しかし、本当にも
う戦争はしないと思ったのか疑問です。

[学習内容3における振り返り]

今日の学習で日本はもう二度と戦争はしな
いという熱い気持ちがあるから、憲法も古
くからある考えをなくそうとしているの
は、すごいと思いました。軍隊は解散したの
に、なぜ自衛隊はあるのか疑問です。

また、学習内容4について、以下のような振り返り(下線部は筆者追記)が見られた。

[学習内容4における振り返り]

サブパフォーマンス課題①で、自分は「平和
な国を目指した」と書いた。戦争で大変な想
いをしたから、平和な国が良いと思った。戦
争が終わって他の戦争をした国はどう思っ
たのだろう。

[学習内容4における振り返り]

オリンピックが開さいされたことで、世
界有数の工業国へと発展した反面、水俣病
などの公害も発生していて、私なら「どうし
てこうなってしまったんだろう」と困ると
思う。今、抱えている日本の問題と何か関わり
があると思う。

1つ目の振り返りからは、「私なら…」と自分
がその時代に生きていたらどう考えたのかと
いう視点と、「今、抱えている日本の問題と…」

と現在の社会問題の連続性の視点という、つながりの見方・考え方を働かせていることが振り返りの記述からうかがえる。2 つ目の振り返りに関して、該当する教科書ページには「交戦国の人々のその後の想い」についての視点はない。自由進度学習としたことで、“自分なりの視点”を持って戦後復興の過程について考えた様子がうかがえる。

本単元の学習では、単元の学習前と学習後に、単元の学習問題「戦争のあと、人々はどのような想いをもって暮らしを立て直し、今日の社会を築いていったのだろうか」についての自分の考えをワークシートに記述させた。さらに、単元の終末では、その学習前と学習後の記述を児童自ら比較し、その感想を書かせた。その記述の一部を以下に示す。

[単元終末における振り返り]

人々は戦争でいろんなことを学んだと思う。だから、今の日本には戦争は起きない仕組みがつられているのだと思う。自分は、物とか利益とかのために命をふつうに失くすことを許すえらい人だったら嫌だとおもった。学習前には人々は悲しい気持ちだろうと思ったけど、学習中と学習後では人々と日本が協力して人々が努力することで工業国へと発展していったということが分かりました。この学習を通して、国民が協力などをすることで、戦争の話などを残し続けることが出来るということが分かったから、自分も友達や家族に戦争の話をして、これからは戦争のことについて残り続けて欲しいなと思いました。

ここでは、ESD の資質・能力の「つながりを尊重する態度」に関連して、身近な問題は過去の課題と密接に関わっているのだから、自分たちがつなげていかなければならないという意識の芽生えが伺える。

次に、これらの学習内容に基づいて取り組まれたサブパフォーマンス課題①における、児童が作成したロイロノートの記述を以下に示す。

[日本の国づくりのタイトル]

もう二度と戦争はしない平和な国、そして環境を守りながら産業を発展させていく国

[理由]

戦争をして、戦争の悲惨さを日本は知ったので、もう二度と戦争はしないという言葉を入れた。

そして産業を発展させていくのも大切だから入れた。けど環境をまもるのも大切だからこの言葉も入れた。

児童らの成果物の記述の中には「平和」「戦争しない」などの日本国憲法の平和主義に関連する表現が多く見受けられた。また、高度経済成長と環境問題に関する記述も多数みられた。学習内容 6 以降、「沖縄の戦後復興の様子」と「教科書の戦後復興」を対比しながら学習を進めたが、米軍統治下におかれた、日本国憲法が適用されない沖縄の戦後復興時の様子は、教科書のそれとは対照的であった。

③学習内容 6 とサブパフォーマンス課題②

サブパフォーマンス課題②へとつながる学習内容 6 について、以下のような振り返りが見られた。

[学習内容 6 における振り返り]

前の沖縄は、危険がたくさんあって、今より苦しい状況だったということをお話し合えました。

[学習内容 6 における振り返り]

今日大切だと思ったことは、何でも勉強したら自分がどう感じるか、ということです。人によって感じ方も違うと思った。50 年後の人たちや自分にも今の気持ちが伝わってほしいと思いました。

[学習内容 6 における振り返り]

改めて、日本国憲法などを学び直して、風化させず学ぶということが大切だと思った。

1つ目と2つ目の振り返りは、複数人で集まって学習を進めていた児童らが友達と感じ方や考えたことを交流したことについて、そのよさや感想をまとめた記述である。また、3つ目の振り返りは、米軍統治下におかれ、日本国憲法が適用される日本への復帰を望んだ沖縄の人たちの様子を資料から学び、日本国憲法の学び直しと憲法制定に至った経過を風化させないという内容の記述となっていた。

次に、この学習内容6に基づいて取り組まれたサブパフォーマンス課題②において、児童が作成した4コマ漫画を図11に示す。

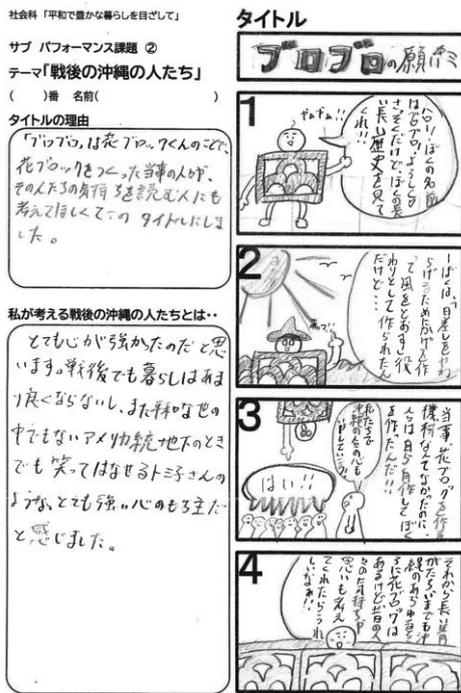


図11 児童が作成した4コマ漫画

この児童の4コマ漫画のタイトルは、「花ブロッコを作った当時の人々がその人達の気持ち(漫画)を読む人たちにも考えてほしい」との思いを込めた記述である。さらに、「私が考える戦後の沖縄の人たちとは、とても心が強かったと思います。～中略～平和な世の中でも、(当時の様子を)笑って話せるトシ子さんのようなとても強い心の持ち主だと感じました。」と書かれていた。

沖縄における戦後当時の様子を、政府(国)や県行政などの視点で学ぶだけでなく、南風原町

に住んでいたトシ子さんといった住民の視点で学んだことで、上記のような振り返りの記述となったと推察する。このように人々の想いや願いを踏まえながら歴史的事象を考察することは、本研究で育成を目指すESDの資質・能力の③多面的・総合的に考える力と⑦進んで参加する態度を育むにあたって非常に重要である。

④パフォーマンス課題

単元を通じた学習内容に基づいて取り組まれたパフォーマンス課題において、以下の「50年後の私への手紙」を児童が作成していた。

[50年後の私へ]
 50年後の私はもう62歳です。今のあなた達の生活は戦争もなくとっても平和に過ごしていると思います。なぜかという、みんな戦争のことについて勉強して知ってるし、戦争しようという人がいてもみんなで止めていると思うからです。私が考える豊かな社会はみんなが学校に行けたり、食べ物を食べれたり、人に命令されて動くのではない自分のことは自分で決める、戦争のない社会です。この社会を実現するためにはみんなが戦争について知ることだと思います。

児童の記述からは、【教科書や資料集、手元の資料でもって、多角的に社会的事象を比較検討した結果、負の歴史から人々は学びそれを生かして今後社会を形成していこうという願いが込められていることがうかがえる。自由進度学習ということで、授業中は数名の男女で声をかけ合って学習を進めていた。一緒に学習していた児童らのパフォーマンス課題の記述を確認したところ、どの児童も“豊かな社会”についての充実した記述がみられた。豊かな社会について、互いに意見を交流しながら考えを形成していったことが推察される。】

他の児童の作成した手紙も含め、全体的に「互いに伝え合うこと」「学び続けること」などの内容が多く見られた。

(3) 授業の分析・考察

① 授業全体を通じた「ESD×自由進度学習」

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の関連から考えると、①批判的に考える力、③多面的・総合的に考える力、⑦進んで参加する態度の力が発揮される場面が多く見られた。教師の主導で授業が進められるよりも、素朴な疑問やクリティカルに史実を捉える児童がより多いことが振り返りシートの記述などから明らかとなった。この理由として、教科書・資料集のみならず、図書資料や保護者との対話がそれらの思考を促したと推察される。

サブパフォーマンス課題②のワークシートの中に「私が考える戦後の沖縄の人たちとは…」という項目を設けた。主に「たくましい」「すごい」「前向き」「くるしい」「大変」などの記述が多くみられた。

米軍統治下から祖国復帰に向かう様子を学ぶワークショップや体験者の動画、インタビューシートを経て、パフォーマンス課題に取り組んだ。授業内だけの取り組みだけでなく、昨年度は地域の博物館とつながり、復帰 50 年の学習を行っているため、当時の状況を知っている児童も多い。終戦直後の悲惨な状況の中で、遅く強かに生活や社会を立て直していった当時の沖縄の人々を多くの児童が上記のような言葉で表現したと考えられる。

エージェンシーの育成について、白井(2020)は「生徒のエージェンシーは自分一人だけで育まれるものではなく、親や仲間、教師やコミュニティなど、周囲との関係性の中で育まれていく」と述べている。今回は、当時の人々のインタビュー動画や読み物資料などから、終戦後にたくましく沖縄社会を復興させた人々の想いに触れ、これからの社会の目指す方向性を当時の人々と共有できた。それらが、自らの社会への関わり方の素地を形成するきっかけになったと考える。まさに、自分で目標を設定し、学びを自覚して調整する姿であった。それらの学習のプロセスが、エージェンシーの育成へとつながっていることが伺えた。

単元終末のパフォーマンス課題において、

「平和」に関する記述が多くみられた。平和な世の中が土台となり、人権が守られ環境が保全されて豊かな社会の形成につながるという具体的な表現は見られなかったため、それらは密接な関係にあることを気づかせる手立てが必要であったという課題が残る。また、「SDGs メガネをかけて、豊かな社会について考えよう」、「これまで学んだことを生かして」と視点を与えて、パフォーマンス課題に取り組みさせたことで、過去と現在、未来をつないで考え表現している児童も見られた。サブパフォーマンス課題の 2 つを踏まえて、単元終末のパフォーマンス課題につなげている様子もうかがえた。

② 成果と課題

以上のことから、成果として次の 5 点を挙げることができる。

- ESD の視点を活用した授業づくりをするにあたって、主に養いたい ESD の資質・能力を踏まえた授業構成としたことで、これからの沖縄について、過去の人たちの工夫や努力を学び考える力の素地を養うことができた。
- 戦後の復興について、地域素材を活用し教材化することで自地域と他地域の往還的な学習が可能となり、多面的・総合的に考える力を働かせる場面が設定できた。
- 年間を通じた花ブロックのカリキュラムを実施することで、過去と今と未来は一つながりのものであることを実感しながら学び、未来の豊かな社会についてえることができた。
- 自地域(沖縄)の歴史について史実を元に学び、自らの頭で考えようとする態度を養い、パフォーマンス課題等の実践的な学びやワークショップ学習などの体験的活動を通して、人権感覚を磨くことができた。
- 授業の形式を単元内自由進度学習としたことで、一方的な知識伝達型の授業形式よりも教師と子どもが学習の進め方(授業の在り方)を共に考える場面が多く設定できた。そのことにより、学ぶ目的を意識し自分の学びを自分で決めるという学習に対する当事者意識が高まった児童も見られた。

また、課題として、次の2点が考えられる。

- ESDの視点を取り入れた授業として進めてきたが、最終的に行動目標を児童自らが立てて社会に働きかけようとする児童がいなかったことは、教師側の手立て不足であった。
- 地域を巻き込み、協働する場面が乏しかった。

課題の1点目について、今後は、児童の立場でPDCAサイクルを回せるよう、ESDカリキュラム全体としての目標を共有し、行動変容を促す仕組みを作る手立てを講じる必要がある。2点目については、子どもたちのエネルギーを外に向け、さらに多様な人と関わりながら進められるようなカリキュラム設計が必要である。

4. おわりに

本研究では戦後の沖縄の歴史に焦点を当て、ESDの視点から、沖縄の地域素材を生かした教材の開発を行った。開発した教材に基づく実践の結果、「自地域と他地域の往還的な学習」や「当事者意識を持った地域学習と行動意欲」につながるものが明らかになった。また、単元内自由進度学習の学習形式を適宜取り入れたことは、児童の主体的に学ぶ態度が大切にされ、更に批判的に考える力の育成につながる可能性が示唆された。したがって、本実践は沖縄の平和の実現に向けたエージェンシーを育む第一歩となると考えられる。

今後の課題として、ESDカリキュラム全体を通した目標の共有と行動変容を促す仕組みの手立てとして、Hart(1997)が提唱する「参加のはしご」の概念を児童と共有し、年間を通して自己の取り組みを省みる場を設定した実践を試みることである。

引用文献

- 開発教育協会(2016).『豊かさと開発』. 開発教育協会.
- 外務省. JAPAN SDGs Action Platform.
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/index.html>
- Hart, R. (1997). *Children's Participation: The*

Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care, Routledge.

「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議(2011).『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画』, <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf>

大石学他72名(2024).『小学社会6』, 教育出版.

桑原敏典・横川和成・高橋純一(2021).「小中学校社会科・総合的な学習の時間におけるSDGsを学ぶ授業づくりの方法—環境問題を取り上げたESDの単元開発を事例として—」,『岡山大学大学院教育学研究科研究収録』, 第176号, pp.47-58.

宮下祐治(2024).「社会構造に着目した水俣病の小学校社会科授業実践—SDGs・ESDとの関連を探って—」.『教育実践研究』, 34, pp.43-48.

文部科学省(2018a).『小学校学習指導要領』, 東洋館出版社.

文部科学省(2018b).『小学校学習指導要領解説 社会編』, 日本文教出版.

OECD著, 秋田喜代美他訳(2019). OECD Future of Education and Skills 2030 OECD Learning Compass 2030 A Series of Concept Notes. https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf

島俊彦(2021).「持続可能な社会の創り手に求められる行動の変容を促す授業構成及び教師の手立てについての—考察—社会科・総合的な学習の時間を関連付けたESD授業実践を事例に—」.『奈良教育大学教職大学院研究紀要学校教育実践研究』, 13, pp.73-81.

新宮済・中澤静男(2020).「ESDとしての行動化を促す単元開発—小学校5年生社会科「国土の森林」の実践から—」.『次世代教員養成センター研究紀要』, 6, pp.81-89.

白井俊(2020).『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』. ミネルヴァ書房.

付記

本研究は京都女子大学令和6年度「研究経費助成」及び九州ルーテル学院大学令和6年度「研究等助成金」の助成を受けた研究成果である。